

実践場面につなげる教科教育法の授業改善

－「授業」ができるようになる授業へ－

人文社会・教育科学系（教育学部） 伊野 義博

1 はじめに

今回、思いもかけず学長教育賞をいただき大変光栄に思っている。関係各位、特に名前はわからないが、当方の授業を推薦してくれたという学生に感謝する。

対象となった授業は、教育学部で教職専門科目として開講されている「音楽科教育法（初等）」である。教員になるために必要な科目として、音楽科の授業の指導法を学ぶことを目的とし、水曜の1, 2限、前期及び後期に開講している。受講生は1クラス40名程度になる。

もとより、自分の授業が卓越しているとは思っていないが、これを機会に今までの実践を振り返り、今後の授業改善につなげたい。

2 示範と模倣

専門職の養成期間としての大学の授業といった点からみるならば、本授業は、教員になるため、具体的には、小学校教員として音楽の授業を実践していくために必要な力を身に付ける場である。子どもの前に立ったときに、例えよちよち歩きでも音楽の授業ができる力を付けなければならない。しかしながら、これは至難の業である。例えば人前で<歌う>という能力を一つ身に付けるということを考えただけでも理解してただけるだろう。また、仮に学生が音楽教育の専門的知識を身に付けたとしても、子どもを惹き付け、意欲を喚起し、当初の授業の目標を達成するためには、表現力、コミュニケーション能力など多様な能力が総合されなければならない。音楽の授業ができるようになるということは、こうした総合的な力を身に付け発揮するようになるということである。

こうした中で、本授業でまず大切にしているのは、授業者自身による示範と学生の模倣による学びである。総合体としての教師の有り様は、個々の力を分析的に示し、統合していくことよりもまず、授業を推進していく姿そのものをそのまま学生に伝えていくことが肝要だと考えている。従って授業では、子どもへの言葉がけ、歌い方、指揮の仕方、歌唱指導の方法、隊形の作り方等々、いちいち模範を示してそれを真似させていく。

例えば、授業の1時間めでは、学生に次のような課題を示している。

「4月、見事教員採用試験に合格して先生になるこ

とができました。新学期が始まって張り切っています。学校へ来たら、自分のクラスのたかし君が当校して来る姿が見えました。ここから30mくらい離れています。たかし君に元気よく声をかけましょう。『たかし君、オハヨー！』

ここで学生に起立させ、一人ずつ全員にこの「たかし君、オハヨー！」を言わせる。想定した状況の中では、まず、たかし君に声が届きその意味が伝わること、そして、明るくさわやかに、一瞬にして対象児童との心の通い合いができるような声や顔の表情をもって言葉を投げかけることが要求される。そのためには、声の出し方や発音の仕方、全身の筋肉の使い方といった技能的な側面が必要なだけでなく、学生自身が心を解放して相手に呼びかけるといった自身の精神のコントロールも要求される。かくして、教室中に「たかし君、オハヨー！」の声が飛び交うことになる。

この際、学生自身が自己を解放できるような雰囲気を作り、教師自身が気持ちを開放して模範を示すことをまず大切にしている。また、声を通らなかつたり発音の仕方が悪かつたりする学生には、それを指摘するとともに、例えば呼吸法などの具体的な解決策を指南していく。

授業は、このような単純な呼びかけから始めて、模擬授業という複雑で総合的な実践場面へと進むが、それぞれの中で示範と模倣が繰り返されていくのである。

3 実践を通して次第にできるようになる授業構成

3.1 赴任当時の授業の問題

授業者はもともと公立中学校の音楽教師をしていた。1992（平成4）年に新潟大学に赴任し、初めて大学の授業を受け持った。

中学校では、50分の授業が一般的であったが、90分といった大学での長時間の授業をどのようにしていったらよいか迷い、結果として、1時間の内容を講義と実践（模擬授業）とに大きく分けて実施することになった。講義では、詳細な資料を作成し、それを説明することが中心で、実践では、学生は、授業プラン（指導案）を作成し、模擬授業を行い、反省レポートを提出するという内容である。

この授業の形はしかし、理論と実践が分離された授業者主体の授業となり、学生は聞くだけの授業、やる

だけの授業になりがちであった。また、授業間の発展性、すなわち、授業をする毎に理解を深め実践力を高めていく面も少なく、学生自身が本当に授業を構成していく力を見つけたかどうかはなほ疑問であった。

そこで、毎回の授業を少しずつ改善していったわけであるが、今思い起こしてみると、次のような点からまとめることができる。

3.2 授業改善

(1) 核となる実践活動

学生自身が現場で実際に授業ができることが大切であるから、大学での授業もまた、実践活動を核とすることにした。

(2) 実践活動と講義をリンク

その実践活動に講義の内容をリンクさせる。例えば、音楽科には、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の活動があるが、歌唱の模擬授業の後には、歌唱に焦点化した内容をその日の模擬授業で浮かび上がった課題ともつなげて講義をしていく。

(3) 積み重ね型の授業

実践内容の精選と系統化、授業の連続性と発展性を図る。指導案の書き方を教え、いきなり模擬授業をさせるといった乱暴な計画を改め、例えば前述したような児童への呼びかけの仕方といった内容・レベルを設定し、次第に複雑系統化し、授業実践に結び付けるようなプログラムを作る。こうした実践をしながら、知的理解を深め、段階的に指導案を作成し、練り上げていく。

(4) その時間でつきたい力の明確化と提示、共有

その日にやるべき内容とつきたい力を文章にし、あらかじめプリントして提示する。これを学生と共有して授業を進める。以下に第4講の例を示す。

【実践：教材研究2（指導内容の抽出）】

○実践の内容

模擬授業の教材の体験と講義をもとに、授業を想定して、教材から指導内容（児童に伝えたい内容）を抽出し、文章化する。

○実践でつきたい力

・配布されたプリントをもとに、教材分析ができる。

・教材分析をもとに、指導内容を考え、文章化できる。

【講義：共通事項と教材分析】

○講義の内容

学習指導要領でいうところの「共通事項」の内容と各分野の指導事項との関係について説明する。また、「共通事項」と「音楽の構造」の説明の具体化として教材分析を行う。

○講義でつきたい力：

・「共通事項」と各指導事項との関係性が理解できる。
・教材分析の方法が具体的にわかる。

(5) 学習者主体の授業

授業者主体の授業から学習者主体の授業に改める。個の智恵を集め、仲間で模擬授業を創っていく。具体的には、班を決め、グループ活動による歌う活動—総合的な表現の活動—模擬授業の段階的な計画へと授業を進めていく。

班毎の実践の繰り返しと評価により、学習指導案を何度も練り直し、質的に高めていく。そして、最終的には、個人によるオリジナリティのある学習指導案の作成を求める。

このようにして、実践を繰り返しながら、だんだん分かっていく、だんだんできるようになっていくよう授業を改善していった。

4 おわりに

目的とする事柄ができるようになるということは、知的な理解のみでは無理である。理論は大学講義で、実践は現場でということは、少なくとも現在の教員養成では通用しない。この方法では、現場で実践できる学生は育っていかない。教師を目指す学生にとって、実際に示範を見ながらその場で真似ていく学習方法はきわめて有効に思える。この意味では、伝統的な徒弟制にもつながる点があろう。実践しながら考えていくようなやり方を大学の授業として系統的に創りあげていくことを考えている。